

『華よそほひ』考

佐藤 悟

明和二年に刊行された富川房信画『華よそほひ』はこれまで「太夫まの落葉」や「吉原遊君百姿」の書名で知られてきた遊女絵本である。後述するように「太夫の落葉」という書名は跋文によるもの、「吉原遊君百姿」は内容に即して後に与えられた書名であった。これは本書がこれまで前後二巻の内の後巻のみしか知られていなかったという事情に起因するものであった。花咲一男「吉原本『花よそほひ』について——『青楼美人合』の藍本」〔註〕において『耽奇漫録』の中の記事から、「吉原遊君百姿」の原書名が「花よそほひ」であることを推定したのは、まさに卓見といえるべきものであった。

パリ国立図書館には『華よそほひ』の完全本が所蔵されている。ただ「Ehon-Tana-tsobi (花あそび)」という書名で目録〔註〕には記載され、画工も「Tomikawa Tousseanobu」と表記されてきたので、これまで注意を払われることがなかったようである。これは題簽の誤読によるものであった。本書は少なくとも修訂を加えながら三度刊行されている。遊女絵本の系譜の上でも重要なものなので小考を付して、影印として紹介することにした。

一 書誌・構成

底本 パリ国立図書館所蔵本 請求番号 Dd.202-203

表紙 丸に梅の花の模様、麻の葉繋ぎ。縦二〇・二糎、横一四・五糎。

題簽 四辺双郭。外題「□□
繪本華よそほひ 前」「
新
本華よそほひ 後」。縦一二・五糎、横二・九糎。

構成

前卷

序一丁。凡例二丁、うち半丁は浅草餅近所の茶店図。遊女姿絵二十五丁。

後卷

遊女姿絵二十五丁。口上半丁。刊記半丁。

序 「序」と「凡例」の全文を以下に翻刻する。

序

娼婦しやうふの盤ばん竜りやう金屈きんくつ膝しとは さてもかたいはく いかに去年きよねん朝鮮人てうせしじんと琉球人りうきうじんか来たとして チンファンカンにておもしろからす 是これをやわらかに申せば かの君きみたちの櫛くし笄かうけい光輝ひかりかゞやきて美をつくしたる事ことなるへし 其美そのび又美またびが指さねは美びにあらず 此美このびいつくにありや そもく日本橋にほんはしより行程こうてい凡六寸一里よろろくすんいちりにして 一万里いちまんりもあらん吉原国よしはらてといへる蓬萊島ほうらいのしま有あり 四時ししとこしなへにして万物ばんぶつ栄さかる こゝに至いたれば人すいになるの徳とくありとて 日ひく新あらたに又日ひく新成遊あらたなるゆふ客猪牙かくちよ四会籠よつでに引ひきもきらす 中にも名高なせうき美倡門びせうもんに行かふさまいと艶也えん 且富川房信ふさのふか筆をかりて 花はなの春はるの初笑はつわらひ

に 青楼のかたわらにして かたはらいたき筆を採る事しかり

酉初春めて度日 駄井埜鬼磨坊

凡例

頃は申の極月ごくげつすゝ煤取も過て浅艸の市 此二日は日本一のくんじゆ ゑいとうくハイ馬じやく 負たと春を手桶へ荷
ひて人に人 推合折から 書林 細見の改め 里へ行て戻りがけ 浅草餅の近所の茶やにて一ぷく吞のまんと腰打掛
し処に 大臣と見へし人 髪は真桑瓜にはあらねと 本多とやらんに結かけ 腰の物は鞘細長く 凡二尺六七寸もあ
らんをいとかるけにさし 中の身は定てかけ直が有へしと 平沢の卦にも出たり 柄糸は何やらん小菱に巻かけ 羽
織の紋は小ぐらかつたやうな物を付 太こ持四五人引連て 氣をかへてこゝにて休まんと どやくとこし打かけ
お定りの銀きせる 稲葉六郎太夫でもいかなくと思ふを かるくと片手に □たばこ盆引寄ても 灰吹へそつと
打付る場おかしからすや かの大臣寛然とし □姉もはや何時そと尋れば いまだ五つ前でござんすといふ いや
今宵は少し待たせてやらん 爰にて咄して行んとの御託宣に 是は大出来 我も毎夜の酒ひたし 氣をかへて
あねいが煮花で咄すも通りもの歟とにじり寄 先くるのは君達の咄をいたさんと 花の江戸町よりはなしかけ 段々
ことばの角町に興を催す 京町新丁きけば聞ほど面白く 書林はおくの長行燈かけたる柱の下にやたて取出し書留
しか かの太じん手を拍て 是はきびしき物なり 大のきまりく御麗しきかんばせに 又俳諧師らしき人申さ
るゝは 十とせ斗以前に 私が此どてのおちやあがりこぼしにてこしうちかけ 風のかほり夏の夜のすゞみかこ付
蜚見のうそ何やかやが落合せて女郎衆の評判したる事侍りしが その翌年正月④此印の本屋から吉原出世鑑とい
ふ評判の一緘になつて出けるが あまり是は穴過てやめになりたり こよひのわれらがおもひ付 女郎衆の姿をう

つして 吉原絵本といたして見たしといへば いやこれは気がながはし 先ッ何千人といふ君たちなれば 書つく
すとも尽すまじ こはよしなんせ すきんせんはしれし御事 しかし咄にはかさねてまたく跡のきみたちをおはな
し申さんも はや気も引四つなれば 殿さま御立と一同にみなくざらめきいそぎけるが 書林はこのあらましをか
きとめ なんでもこれはしてとりのはつ春の新板しゆかう是なりと 歛びがらすの声は

柱刻 なし

画工 富川房信

跋文 「口上」の全文を以下に翻刻する。

口上

東西く高うはござりまするが これよりお断申上まする絵本も程なふ千秋楽なれば そこらへ投て置なさらぬ内
に ちよつと申上まする 扱此本の女郎衆 画ともつきせず 写しも尽せぬ 名も高砂の太夫の落葉の君沢山とは申
せども 段く出来しだい出し申候 先ッは当春出来の分を全部二冊といたし 各さまの御手にふれまする 是
ほどの女郎衆でも 他所へ御つれなさるゝは 御当地の御方でも成りかたきを 田舎大臣何方御国元までも御同道な
さるゝは 何万何千両でもいつかなできぬ事を 御懐中なさるゝやうにいたすは さつても安い本かな 爰へも
三冊かしこへも五冊と御求め下さるゝ様二 ホ、うやマツテモウス

刊記

東武

明和二年西歲

絵師 富川房信（印）

正月吉日

彫工 関根新兵衛（印）

書林

小泉忠五郎（印）

菊屋清次郎（印）

浅草御地内

伊勢屋吉重郎

武江

大伝馬町三丁目

鱗形屋孫兵衛

（印）

備考

仮名垣魯文旧蔵。蔵書印「魯文」（墨色橢円印）。前編見返しに「秋のよは明てもしはし月夜かな 音曲廓住 観齋」、前編裏表紙見返しに「細見をみる人々ははからしい 京二 雅清」と墨書。後編裏表紙見返しに「音曲廓住 観齋 守書」と墨書。

なお描かれた遊女の画像に①から⑩までの番号を付した。

二 板元と諸本

板元については、凡例や跋文を見れば、「書林 細見の改め」「㊦此印の本屋から吉原出世鑑といふ評判の一臧」とあることから、伊勢屋吉重郎が実質的な板本であることは明らかであろう。

「主要版元別細見一覧」^{〔注3〕}によれば、本屋吉十郎は鱗形屋版の延享二年春の吉原細見からその名が「改仕売所」として

見え、宝暦九年春刊『宝八木』から伊勢屋吉十郎を名乗っている。しかし伊勢屋吉十郎の名は明和六年春の吉原細見から消えてしまう。代わって木村屋善八が鱗形屋板細見の改所として登場する。『登まり婦寝』の刊記には木村屋善八の名が改所として記されているものもあり、この時期に伊勢屋吉十郎は営業を停止したのであろう。

吉原内にあった本屋の小泉忠五郎は延享三年秋『夕もみち』に「改仕売所」としてその名が見える。宝暦十一年春刊『初みとり』から明和六年春刊『登まり婦寝』まで小泉忠五郎と伊勢屋吉十郎が「改仕売所」として共に名を連ねている。小泉忠五郎は明和七年春刊『吉原細見天の浮橋』の板元となり、安永四年秋まで細見を刊行する。吉原細見の改所として小泉忠五郎の名は幕末まで残る。

木村屋善八も宝暦五年秋刊の鱗形屋板とされる吉原細見に「さいけん有 木むらや善八」と見えることが『吉原細見年表』には記され、京町二丁目左側にあった吉原細見の販売店であったことが知られる。明和六年春刊の鱗形屋板『遊女あはせ』にも「細見売所 木むら善八」と見え、明和七年春刊鱗形屋板『細見和哥三鳥』から細見の改としてその名が見える。この時期に鱗形屋板の吉原細見の改を巡ってなんらかの問題が生じていたのであろう。

【たばこと塩の博物館本】

後編一冊存。パリ国立図書館本と同板。題簽を欠き、跋文から「太夫の落葉」という仮題が付されている。『版本』（たばこと塩の博物館、一九九〇年）p.313-p.316に後編の図版が紹介され、同書所収、鈴木重三「江戸時代の出版―その展開事情と特性―」に言及（p.523）がある。

【天理図書館本】

「吉原遊君百姿」と表紙に墨書してあるが、現存するのは後編の五十人分である。^{69・70と99・100}の遊女の二丁分が乱丁となっている（遊女の番号については「三 遊女姿絵」参照）。書名と次に述べる東京古典会出品本から考えても、本来は百人すべての遊女が揃っていたものと思われる。

画面の右上の妓楼名と遊女名が削られるが、紋と町名、それらが記されていた枠は残されている。また刊記から「浅草御地内 伊勢屋吉重郎／大伝馬町三丁目 鱗形屋孫兵衛」という板元名が削られている。妓楼名と遊女名が削られた理由としては【別表2】「遊女変遷表」から理解されるように、遊女の退廓、もしくは死亡による遊女名跡の断絶が考えられる。さらに明和五年四月五日に吉原が全焼し、仮宅や吉原内における妓楼の住所の変更により、町別順という配列が意味を失ったことも挙げられよう。板木も伊勢屋吉十郎から小泉忠五郎に移動し、妓楼名と遊女名を削除して刊行されたのであろう。しかし後述するように小泉忠五郎は明和六年秋には『青楼美人合』の刊行に参画したと思われるので、刊行時期は火災後から明和六年春の間と考えられる。

さらに⑦⑤の遊女、京町二丁目角金屋平十郎の岩手の画像の発句賛が「金糸紋松きんしもんも名はなくきぬくはり」と変えられている。岩手については「遊女変遷表」でも明和三年江春刊『ウ来門』以外は空欄であることから、彗星のように現れて消えた遊女である。また改変の時期は金屋平十郎にこの変えられた発句賛に該当する遊女が見えず不明である。

【東京古典会出品本】

平成十七年十一月の東京古典会に九三三番「吉原花の姿名寄」として出品された。刊記の「明和二酉」を削って「安永八亥」と入木し、書林名「小泉忠五郎」「菊屋清次郎」と書林印を削去している。画面は右上の枠、及び遊女の紋、町名を削り、入木によって画面に連続性を持たせている。『古典籍展観大入札会目録』には⑤②・⑤⑤が見開きで紹介（p.247）を

れている。麻の葉繋ぎの替表紙ではあるが、「華よそほひ」と判読できる元題簽が残っている。序文三丁と後編部分が⑤3・⑤4、⑤7・⑤8、⑤9・⑥0、⑥3・⑥4の四丁分を除いて残っている、落丁本と思われる。小泉忠五郎は安永四年春の吉原細見を最後に吉原細見の刊行を停止したようなので、板木の譲渡もこのことと関わっていたのかもしれない。

吉原は明和八年四月二十三日に全焼し、明和九年二月二十九日にも大火があつて、それぞれ仮宅で営業となつている。『青楼美人合』の板木が吉原で焼失したとしたら、どこかで保管されていた『華よそほひ』の板木が再び商品としての価値を有するようになり、修訂の上、刊行されたのかもしれない。

三 遊女姿絵

画面は各半丁に遊女の姿を記し、また右上の枠内に住所、妓楼名、遊女の紋を記し、画面中に発句を記す。整理のため、遊女の姿絵の掲載順に番号を付し、住所、妓楼名、発句を記す次のようになる〔別表1〕。発句は遊女の名や紋を読み込んだもので、遊女の作品ではなく、編者によるものと思われる。

またところどころに江戸町①、二丁目③③、京町⑥③、新町⑦⑦という町名が記されているが、これは江戸町一丁目、江戸町二丁目、京町一丁目、京町二丁目を指すものである。角町が落ちているが、後述するように明和期の吉原細見と対校すると⑤⑤からが角町となる。何らかの理由で、町名が落ちてしまったのであろう。この町名は吉原細見の掲載順と一致し、妓楼は各町とも仲の町から右側、左側という吉原細見と同じ原則で記されている。遊女は序列順に描かれるのが原則のようであるが、細見とは必ずしも一致しない。遊女の序列の変動は同じ年の細見でも春と秋とは異なることがあり、刊行が企画された時の序列にしたがったものであろう。したがって遊女は吉原の町名、妓楼の順に分類され

【別表 1】

⑭	⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	番号
													江戸町	町名
同	玉屋	同	天満や	同	同	なし	なし	なし	なし	同	同	同	松葉屋	妓楼
誰袖 <small>たがそで</small>	こむらさき	しがらみ	こゆるぎ	きんざん	八雲 <small>やくも</small>	なし	なし	なし	なし	まつ風	若那	はつ風	そめ之助	妓名
大文字は長閑なりたが袖に墨 <small>のどか</small>	江戸に咲菊の色ありこむらさき <small>さくきく</small>	柵 <small>しがらみ</small> に蒔 <small>ま</small> やのとけき哥 <small>うた</small> がるた	香 <small>か</small> や花 <small>はな</small> や君 <small>きみ</small> は火鉢 <small>ひばち</small> にむかふ梅 <small>うめ</small>	金糸 <small>きんし</small> にて紋 <small>もん</small> にも咲 <small>さく</small> や梅の山	居 <small>い</small> つゞけといふ春雨 <small>はるさめ</small> や雲 <small>くも</small> の脚 <small>あし</small>	筆直 <small>ふでなを</small> し儒書 <small>じゆしよ</small> にかなかきてふの夢 <small>ゆめ</small>	吉里 <small>さと</small> の紋日 <small>もんひ</small> の繰 <small>く</small> や露自在 <small>ふきじざい</small>	たかの羽 <small>は</small> の京染山 <small>きやうぜん</small> やきそははじめ	うきに浮舟 <small>うきふねのり</small> 乗ぞめをみつかしは	客 <small>きやく</small> に客受 <small>きやくうけ</small> もひかへも松の内	やく束 <small>たば</small> の手に手つむなりわか葉の日	初 <small>はつ</small> かぜの便帆 <small>へんぱ</small> に帆のたから船	蓬葉 <small>ほうらい</small> の松や日の出 <small>で</small> に染 <small>そめ</small> の助	発句

②9	②8	②7	②6	②5	②4	②3	②2	②1	20	19	18	17	16	15
同	なし	なし	なし	なし	同	同	同	同	大かづさ屋	同	新かづさ屋	同	同	同
大さと	なし	なし	なし	なし	あづまんと	櫛 ^{まき} の尾 ^を	あさの、	まきしの	あづまや	たちばな	かほる	若紫 ^{わかむらさき}	花むらさき	玉づさ
杜若 ^{かきつばた} きつ、なれ大 ^{おほ} さとの妻 ^{つま}	雪 ^{ゆき} にさへ火 ^ひ を燈 ^{とち} すとよ里 ^{。のさと} の秋 ^{あき}	常盤 ^{とぎはと} 戸 ^は の松 ^{はやし} 囃子 ^{はやし} あり置 ^{をきつ} 鼓 ^み	軒 ^{のき} つたふ瀧 ^{たき} 川 ^{かわ} 見 ^み たり菖蒲 ^{あやめくさ} 艸	三 ^{さん} 弦 ^{げん} の駒 ^{こま} もいさむや花 ^か の香 ^か に	やくそくを待 ^{まつ} や東 ^{あづま} の桜 ^{さくら} 人	文書 ^{かい} てまきの尾 ^を や雛 ^{ひな} の客 ^{きやく} にきやく	きぬくの朝 ^{あさ} の、の酒 ^{さけ} や雛 ^{ひな} の重 ^{ぢゆう}	投入 ^{なげいれ} の花 ^{はな} まきしのや琴 ^{こと} の瀧 ^{たき}	咲揃 ^{さきそろ} ふ華 ^{はな} のあづまや源氏 ^{げんじ} 知 ^し り	紋 ^{もん} は八重 ^{やえ} めにたちはなや富貴 ^{ふうき} 艸 ^{くさ}	名 ^な も薫 ^{かほ} る寄留 ^{きりう} の手元 ^{てもと} や星 ^{ほし} 祭 ^{まつり}	名 ^な も涼 ^{すず} しわかむらさきに源氏 ^{げんじ} 香 ^{かう}	口 ^{くち} 切 ^{きり} りに花 ^{はな} 紫 ^{むらさき} のふくさかな	玉章 ^{たまづさ} に伊 ^い 物書 ^{ものかき} こめ鶴 ^{つる} の春 ^{はる}

④④	④③	④②	④①	④①	③⑨	③⑧	③⑦	③⑥	③⑤	③④	③③	③②	③①	③①
											二丁目			
なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	つたや	つたや	つたや	つたや	同	ゑびや	同
なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	さんしう	みちのく	しほぎぬ	くれなる	小のゝみ	金ざん	岩 <small>いは</small> こす
うわ客 <small>きやく</small> に松 <small>まつ</small> は常盤路 <small>とぎわぢ</small> ふゆ籠 <small>ごもり</small>	たちばな <small>かほ</small> の薫 <small>かほ</small> るや雨 <small>ちや</small> の茶屋 <small>あん</small> の縁 <small>えん</small>	雛鶴 <small>ひなづる</small> の心 <small>しん</small> 心 <small>しん</small> も松 <small>まつ</small> のはる	むつまじ <small>ほん</small> や本 <small>ほん</small> にも少し <small>てふつが</small> 蝶番 <small>てふつが</small> ひ	藤波 <small>ふじなみ</small> の蹴出 <small>け</small> すや裾 <small>すそ</small> の中の町	水際 <small>みづぎは</small> の立 <small>た</small> や桔梗 <small>ききやう</small> をみなへし	紋 <small>もん</small> に見 <small>み</small> る橋中 <small>きつちうせん</small> 仙 <small>せん</small> や春 <small>はる</small> の江戸	燈籠 <small>とうろう</small> に客 <small>きやく</small> は花 <small>はな</small> まき道 <small>みち</small> 成寺 <small>じやうじ</small>	春雨 <small>はるさめ</small> やぬしとかぶろと三つ柏 <small>がしは</small>	陸奥 <small>みちのく</small> のしのぶやもしの古今集 <small>こきんしう</small>	誰 <small>たれ</small> も濡 <small>ぬ</small> てしほきぬや手 <small>て</small> をつくし琴 <small>こと</small>	くれなるに十寸 <small>す</small> 見 <small>み</small> や蔦 <small>つた</small> かづら	床 <small>とこ</small> の間にをのゝみいとや寶 <small>たから</small> ふね	星合 <small>ほしあひ</small> や色 <small>しき</small> 昏 <small>し</small> にまじる雪 <small>ゆき</small> と菱 <small>ひし</small>	客 <small>きやく</small> は衛 <small>えい</small> いわ越波 <small>こすなみ</small> のうつくしき

59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45
同	ひしや	角まんじ屋	同	大まびや	同	玉屋	同	きり屋	同	同	若菜や <small>わかな</small>	同	同	同
花さん	うき雲	しづはた	ゑびら	歌の助 <small>うた</small>	わか浦	静 <small>しづか</small>	まきぐぬ	つまき	玉かづら	なには津	きく園 <small>その</small>	ひな町	歌浦 <small>うたうら</small>	てうさん
鶴 <small>つる</small> の舞 <small>ま</small> ふ神 <small>かみ</small> も八幡 <small>やわた</small> や花 <small>はな</small> の山	うきくもに羽 <small>は</small> を <small>のすつる</small> 熨 <small>のすつる</small> 鶴 <small>つる</small> やはつ日影 <small>かげ</small>	きやくはみな志津 <small>しづ</small> 機焼 <small>はたやき</small> や砂糖水 <small>さとうみづ</small>	兵 <small>つはもの</small> のほまれ簾 <small>あひら</small> か梅 <small>うめ</small> の紋 <small>もん</small>	躍 <small>おどり</small> かな芸子 <small>げいこ</small> に望 <small>のぞ</small> むうたのすけ	去年 <small>こぞ</small> ことし歳 <small>とし</small> も若 <small>わか</small> うら文 <small>なみ</small> の波	入舟 <small>いりふね</small> に凌霄 <small>のうぜん</small> も風しづかなり	襠 <small>かいとり</small> をまきぐぬやこの縁 <small>えん</small> の霜 <small>しも</small>	やがて誰 <small>た</small> が妻木 <small>つまき</small> ぞ花 <small>はな</small> の真盛 <small>まつさか</small> り	蘿 <small>つた</small> を巻紋 <small>まくもん</small> のすがたやたまかづら	浪花津 <small>なには</small> に咲 <small>さく</small> や桔梗 <small>ききやう</small> の紋所 <small>もんどころ</small>	菊園 <small>きくその</small> のその色くや新古今 <small>しんこきん</small>	咲 <small>さき</small> くてひなまちゑたり桃 <small>もも</small> さくら	なげいれと菊 <small>きく</small> たち花 <small>はな</small> の立 <small>た</small> すがた	雛 <small>ひな</small> つれて丹 <small>たん</small> てう山 <small>さん</small> の鶴 <small>つる</small> の春 <small>はる</small>

⑦4	⑦3	⑦2	⑦1	⑦0	⑥9	⑥8	⑥7	⑥6	⑥5	⑥4	⑥3	⑥2	⑥1	⑥0
				新町							京町			
同	同	同	同	かなや	同	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	中万字や
しけさと	勝やま	うてな	しづはた	七綾 <small>ななあや</small>	花の井	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	恋さん
竹本 <small>たけもと</small> に鶴 <small>つる</small> もしげるや里 <small>さと</small> の春 <small>はる</small>	唄涼 <small>うたすず</small> し富士 <small>ふじ</small> にかつ山紋 <small>やまもん</small> 尽 <small>つく</small> し	風光 <small>ひか</small> る玉 <small>たま</small> の台 <small>うてな</small> や琴 <small>こと</small> の反 <small>そり</small>	羽 <small>は</small> を伸 <small>の</small> て鶴 <small>つる</small> の歩 <small>あゆ</small> みや松 <small>まつ</small> の春	七夕 <small>こと</small> に琴 <small>こと</small> の鏝 <small>かざり</small> や綾錦 <small>あやにしき</small>	下戸 <small>げこ</small> ならで花 <small>はな</small> の井 <small>ゐ</small> に涌泉 <small>わくいづみ</small> かな	手枕 <small>たまくら</small> にねさしも涼 <small>すず</small> し花 <small>はな</small> の出来 <small>でき</small>	駿河屋 <small>するか</small> に涼 <small>すず</small> しき富士 <small>ふじ</small> やまつの君 <small>きみ</small>	はるか野 <small>の</small> にたれも抱 <small>だき</small> あふ小松引 <small>ひき</small>	茶 <small>ちや</small> や／＼に照 <small>て</small> るや田毎 <small>たごと</small> の月見客 <small>きやく</small>	三つ蒲団 <small>ふとん</small> よしの、華 <small>はな</small> の錦山 <small>にしき</small>	若 <small>わ</small> ／＼とまつの衣紋 <small>みめん</small> のふかみ艸	君涼 <small>きみすず</small> し琴 <small>こと</small> は座敷 <small>ざしき</small> の中まんじ	客 <small>きやく</small> も升 <small>ます</small> や花山 <small>はな</small> をこ、に台 <small>だい</small> のもの	恋さん <small>こひ</small> の恋見 <small>こひ</small> ならひつ雛 <small>ひな</small> にひな

89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75
同	同	中あふみや	同	同	同	同	同	ゑちぜんや	同	桐菱 <small>きりひし</small> や	同	同	大びしや	同
みつ浦 <small>うら</small>	みやこぢ	半太夫	ことぶき	若むらさき	みなと	九重 <small>このえ</small>	小式部 <small>こしきふ</small>	花の井	わか波	姫 <small>ひめ</small> きく	なを江	玉篋 <small>たまぎ</small>	ひとえ	岩手 <small>いはで</small>
御座敷も宝の浦や三つの朝 <small>あさ</small>	墨もよしならの都路筆はじめ <small>みでちふで</small>	美しくいの根さゝや雪の三つぶとん <small>ゆき</small>	蝶まふや寿筆の文の艶 <small>つや</small>	人形も大のきまりや江戸の春 <small>にんぎやう だい</small>	鶴のはる湊に客の入帆かな <small>つる みなと いりほ</small>	八重桜けふこのえにむかひつる <small>やえざくら</small>	夏の夜も小しきぶや本にむかひ鶴 <small>なつ よ こしき ほんに むかひ つる</small>	花のゐやふりわけ髪 <small>がみ</small> のむかひ鶴	やくそくをいくつうち寄る菊の波 <small>よ きく なみ</small>	島台や峰のひめ菊松の内 <small>しまたい みね きくまつ</small>	華といふなげいれや <small>はな</small> を江戸桜 <small>。。</small>	たまさゝに琴の調 <small>しら</small> べや若みどり <small>わか</small>	紋は八重名はひとえかな花 <small>はな</small> の顔 <small>かほ</small>	一節のいはでもそれと江戸のはる <small>ひとふし</small>

て記されていることになるので、序文等から明らかではあるが、『華よそほひ』は吉原細見の一種として制作されたことが、画像の順番からも知られる。これらの遊女を以下の明和期の吉原細見と対校し、一覧としたのが次の「遊女変遷表」【別表2】である。

使用した吉原細見は以下の通りである。

⑩⑩	同	にしきゞ	花錦 <small>はなにしき</small> その名 <small>な</small> に伊達 <small>いたて</small> を染木 <small>そめぎ</small> かな
⑨⑨	同	なを波 <small>なみ</small>	花生 <small>はなけ</small> になを <small>な</small> を波 <small>なみ</small> の柳哉 <small>やなぎかな</small>
⑨⑧	同	むらさ野	むらさ野 <small>の</small> や扇 <small>あふぎ</small> に筆 <small>ふで</small> のはしりがき
⑨⑦	同	ゑびら	花ゑびら梅 <small>むめ</small> が枝 <small>え</small> うたふ琴 <small>こと</small> の曲 <small>きよく</small>
⑨⑥	同	なを江	聞 <small>き</small> てなを <small>な</small> を <small>な</small> に <small>し</small> や花 <small>はな</small> の小短冊 <small>こたんさく</small>
⑨⑤	かな屋	うら里 <small>さと</small>	浦里 <small>うらさと</small> にいろのうつりや薦 <small>つた</small> の水
⑨④	長崎屋 <small>ながさき</small>	うらきく	薦 <small>つた</small> の葉 <small>は</small> の裏 <small>うら</small> から伝 <small>つた</small> へ菊 <small>きく</small> の水
⑨③	同	まつ風	三味線 <small>さんみせん</small> も美 <small>み</small> に通 <small>かよ</small> ふらし松 <small>まつ</small> のかせ
⑨②	山しろや	まつ山	うつくしく今朝 <small>けさ</small> の春 <small>はる</small> まつ山 <small>まつ</small> かづら
⑨①	同	かめつる	亀鶴 <small>かめつる</small> に松立 <small>まつたて</small> るかどの尾張米 <small>おはりこめ</small>
⑨①	同	あづまど	吾妻人 <small>あづまど</small> のしるし天筆 <small>てんひつ</small> 和合 <small>わがうく</small> 楽

【別表 2】 遊女変遷表

番号	町名	妓楼	妓名	妓楼	推定妓名	明1春	明2春	明3春	明3秋	明4春	明5春	明6秋	明7秋	明8春
1	江戸町 (一丁目)	松葉屋	そめ之助	松葉屋半左衛門		●	●	●	●	●	●	●	●	●
2		同	はつ風	松葉屋半左衛門		●	●	●	●			●	●	●
3		同	若那	松葉屋半左衛門		●	●	●	●	●	●	●	●	●
4		同	まつ風	松葉屋半左衛門			●	●	●	●				
5		なし	なし	松葉屋半左衛門	浮ふね	●	●	●	●	●	●	●	●	●
6		なし	なし	松葉屋半左衛門	染やま		●							
7		なし	なし	万字屋半四郎	吉里	●	●	●	●	●	●			
8		なし	なし	万字屋半四郎	きてう		●	●						
9		同	八雲	万字屋半四郎		●	●		●					
10		同	きんざん	万字屋半四郎										
11		天満や	こゆるぎ	天満屋伊右衛門		●	●	●	☆	●	●			
12		同	しがらみ	天満屋伊右衛門		●	●	●	☆					
13		玉屋	こむらさき	玉屋山三郎			●	●						
14		同	誰袖	玉屋山三郎			●	●	●					
15		同	玉づさ	玉屋山三郎		●	●	●	●					
16		同	花むらさき	玉屋山三郎		●	●	●	●	●	●	●		
17		同	若紫	玉屋山三郎		●	●	●	●	●				
18		新かづさ屋	かはる	新上総屋利右衛門		●	●	●	●					
19		同	たちばな	新上総屋利右衛門		●	●	●	●	●	●			
20		大かづさ屋	あづまや	大上総屋治右衛門			●	●						
21		同	まきしの	大上総屋治右衛門			●	●				●		
22		同	あさの、	大上総屋治右衛門			●	●	●					
23		同	横 ^{よこ} の尾	大上総屋治右衛門		●		●	●	●	●	●	●	●
24		同	あづまんと	大上総屋治右衛門		●	●	●	●	●				
25		なし	なし	扇屋勘兵衛	はなの香	●	●	●	☆					
26		なし	なし	扇屋勘兵衛	瀧川	●	●	●	☆	●	●	●	●	●
27		なし	なし	扇屋勘兵衛	ときわ戸	●	●	●	☆	●	●	●	●	

七十九 『華よそほひ』考

番号	町名	妓楼	妓名	妓楼	推定妓名	明1春	明2春	明3春	明3秋	明4春	明5春	明6秋	明7秋	明8春
28		なし	なし	巴屋源右衛門	豊里		●	●	☆					
29		なし	大さと	巴屋源右衛門	あふ崎?	●	●	●	☆	●	●			
30		同	岩こす	巴屋源右衛門		●	●	●	☆					
31		ゑびや	金ざん	海老屋吉右衛門		●	●	●	●					
32		同	小のゝみ	海老屋吉右衛門		●	●	●	●					
33	二丁目 (江戸町)	つたや	くれなゐ	葛屋利右衛門			●	●						
34		つたや	しほざぬ	葛屋利右衛門		●	●	●	●	●	●	●	●	●
35		つたや	みちのく	葛屋利右衛門		●	●	●	●	●	●			●
36		つたや	さんしう	葛屋利右衛門		●	●	●	●	●	●	●	●	●
37		なし	なし	一文字屋清介	はな巻	●	●	●	●					
38		なし	なし	蔓葛屋庄次郎	若紫	●	●	●	●					
39		なし	なし	蔓葛屋庄次郎	女郎花	●	●	●	●	●	●			
40		なし	なし	兵庫屋平兵衛	ふじ浪	●	●	●	●	●	●			
41		なし	なし	兵庫屋平兵衛	丹しう	●	●	●	●	●	●			
42		なし	なし	丁字屋長左衛門	ひな鶴		●	●	●	●		●	●	●
43		なし	なし	丁字屋長左衛門	かほる	●	●	●	●					
44		なし	なし	丁字屋長左衛門	常盤路			●	●					
45		なし	てうさん	丁字屋長左衛門		●	●	●	●	●	●		●	●
46		同	うたうら 歌浦	丁字屋長左衛門		●	●	●	●	●	●			
47		同	ひな町	丁字屋長左衛門		●	●	●	●	●	●	●	●	●
48		若菜や	その きく園	大若菜屋吉之介		●	●	●	●					
49		同	なには津	大若菜屋吉之介			●	●	●					
50		同	玉かづら	大若菜屋吉之介		●	●	●	●	●				
51		きり屋	つまき	桐屋吉左衛門		●	●	●	●					
52		同	まさゝぬ	桐屋吉左衛門										
53		玉屋	しづか 静	玉屋庄兵衛		●	●	●	●	●	●		●	
54		同	わか浦	玉屋庄兵衛			●	●						
55	(角町)	大ゑびや	うた 歌の助	海老屋利右衛門		●	●	●	●	●	●	●	●	●

番号	町名	妓楼	妓名	妓楼	推定妓名	明1春	明2春	明3春	明3秋	明4春	明5春	明6秋	明7秋	明8春
56		同	糸びら	海老屋利右衛門		●	●	●	●	●	●	●	●	●
57		角まんじ屋	しづはた	角万字屋庄左衛門		●	●	●	●	●	●	●		
58		ひしや	うき雲	菱屋権左衛門		●	●	●	●	●	●			
59		同	花さん	菱屋権左衛門		●	●	●	●	●	●			
60		中万字や	恋さん	中万字屋庄兵衛			●	●						
61		なし	なし	中万字屋庄兵衛	花山	●	●	●	●					
62		なし	なし	中万字屋庄兵衛	つま琴	●	●	●	●	●	●			
63	京町	なし	なし	俵屋四郎兵衛	若松		●	●			●		●	●
64		なし	なし	俵屋四郎兵衛	よし野	●	●	●	●	●				
65		なし	なし	俵屋四郎兵衛	たことの	●	●	●	●	●		●		
66		なし	なし	伊世屋甚右衛門	春日野	●	●	●	●					
67		なし	なし	伊世屋甚右衛門	まつかせ	●	●	●	●					
68		なし	なし	柏屋治右衛門	たまくら	●	●	●	●	●				
69		同	花の井	柏屋治右衛門		●	●	●	●	●	●	●		
70	新町 (調二丁目)	かなや	七綾 <small>ななあや</small>	角金屋平十郎		●	●	●	●	●	●	●	●	●
71		同	しづはた	角金屋平十郎			●	●	●					
72		同	うてな	角金屋平十郎		●	●		●	●	●	●		
73		同	勝やま	角金屋平十郎		●	●		●	●	●	●		
74		同	しけざと	角金屋平十郎		●	●	●	●		●	●		
75		同	岩手 <small>いはで</small>	角金屋平十郎				●						
76		大びしや	ひとえ	大菱屋久右衛門		●	●	●	●	●	●	●	●	●
77		同	玉笹 <small>たまざし</small>	大菱屋久右衛門			●	●	●				●	●
78		同	なを江	大菱屋久右衛門		●	●	●	●	●	●			
79		桐菱や <small>きりひし</small>	姫さく <small>ひめ</small>	桐菱屋権兵衛		●	●	●	☆	●	●	●	●	
80		同	わか波	桐菱屋権兵衛		●	●	●	☆	●	●	●		
81		糸ちぜんや	花の井	越前屋喜右衛門		●	●	●	☆					
82		同	小式部 <small>こしきふ</small>	越前屋喜右衛門		●	●	●	☆	●	●			
83		同	九重 <small>ここのえ</small>	越前屋喜右衛門		●	●	●	☆					

七十九 『華よそほひ』考

番号	町名	妓楼	妓名	妓楼	推定妓名	明1春	明2春	明3春	明3秋	明4春	明5春	明6秋	明7秋	明8春
84		同	みなと	小松屋源左衛門			●	●	☆					
85		同	若むらさき	小松屋源左衛門		●		●	☆					
86		同	ことぶき	小松屋源左衛門		●	●		☆	●			△	△
87		中あふみや	半太夫	中近江屋善十郎		●	●	●	☆	●	●	●	●	●
88		同	みやこち	中近江屋善十郎		●	●	●	☆	●	●			●
89		同	みつ浦 ^{うら}	中近江屋善十郎		●	●	●	☆	●				
90		同	あづまど	中近江屋善十郎		●	●	●	☆	●	●	●		
91		同	かめつる	中近江屋善十郎		●	●	●	☆	●	●			
92		山しろや	まつ山	山城屋九兵衛			●	●	●					
93		同	まつ風	山城屋九兵衛		●	●	●	●	●	●	●	●	●
94		長崎屋	うらさく	長崎屋平左衛門			●	●						
95		かな屋	うら里 ^{きと}	長崎屋平左衛門			●	●						
96		同	なを江	金屋あひ		●	●	●	●					
97		同	あびら	金屋あひ		●	●	●	●					
98		同	むらさ野	金屋あひ		●	●	●	●	●				
99		同	なを波 ^{なみ}	金屋あひ			●	●	●					
100		同	にしき ^き	金屋あひ		●	●	●	●	●	●	●		

☆は落丁

△は小松屋が越前屋に吸収されたと仮定した場合。

推定妓名は『水かゝみ』による。

宝暦十四年春刊『細見富士の袖』（鱗形屋板、大阪大学忍頂寺文庫蔵）

明和二年春刊『水かゝみ』（板元不明、天理図書館蔵）

明和三年春刊『ウ来門』（鱗形屋板、大阪大学忍頂寺文庫蔵）

明和三年秋刊『新吉原細見』（鱗形屋板、天理図書館蔵）

明和四年春刊『真木柱』（鱗形屋板、天理図書館蔵）

明和五年春刊『美名の川』（鱗形屋板、近世風俗研究会の複製）

明和六年秋刊『登満里婦寝』（鱗形屋板、近世風俗研究会の複製）

明和七年秋刊『目明千人』（鱗形屋板、近世風俗研究会の複製）

明和八年春刊『黒仕立』（鱗形屋板、近世風俗研究会の複製）

結論としては明和二年春の吉原細見『水かゝみ』と最も一致するようであるが、明和元年の早い時期から時間をかけて遊女を撰定し製作されていることが判明する。遊女の序列の異同もそのような状況を反映しているのであろう。『水かゝみ』は遊女の紋や座敷の位置、新艘や禿の名が記されるという特異なスタイルの吉原細見で、発句と合わせて考えると、妓楼名や遊女名が空欄となっている遊女の名をほぼ特定することができる。

⑤は「うきに浮舟乗ぞめをみつかしは」という発句から松葉屋半左衛門内の浮船と推定することができる。『水かゝみ』に見える紋は桐で、『花よそほひ』の三つ柏とは異なるが、発句にも「みつかしは」と読み込んでいるので、浮船と考えて良い。

⑥は「たかの羽の京染山やきそはじめ」という発句と紋から松葉屋半左衛門内の染山と推定される。『水かゝみ』の紋とも一致する。

⑦は「吉里の紋日の繰や路自在」という発句と紋から万字屋半四郎内の吉里と推定される。『水か、み』と紋も一致する。

⑧は「筆直し儒書にかなかきてふの夢」という発句の「きてふ」に傍点が打つてあるので、万字屋半四郎内のきてうと知られる。紋は『水か、み』と一致する。

⑨のあづまやと⑩のまさしのはともに大上総屋治右衛門内の遊女であるが、紋が『水か、み』と一致しない。

⑪は「三弦の駒もいさむや花の香に」という発句から扇屋勘兵衛内の花の香と推定される。『水か、み』と紋も一致する。

⑫は「軒つたふ瀧川見たり菖蒲艸」という発句から扇屋勘兵衛内の瀧川と知られる。『水か、み』と紋も一致する。

⑬は「常盤戸の松囃子あり置鼓」という発句から扇屋勘兵衛内のときはとと推定され、『水か、み』と紋も一致する。

⑭は「雪にさへ火を燈すとよ里の秋」という発句の「とよ里」に傍点が振つてあることから巴屋源右衛門内の豊里ということになる。『水か、み』と紋も一致する。『耽奇漫録』に紹介された一図である。

⑮の大きとは巴屋源右衛門内の遊女ということになるが、諸細見に見えるあふ崎を誤ったものであろうか。紋も一致するし、⑯の豊里、⑰の岩こすとの序列上も『水か、み』と矛盾しない。ただ発句には「杜若きつ、なれ大きとの妻」とある。

⑱は「燈籠に客は花まさ道成寺」という発句から一文字屋清介内のはな巻ということになる。紋は『水か、み』記載のものと同じである。

⑲は「紋に見る橘中仙や春の江戸」という発句から遊女名を推定することはできない。一文字屋清介の隣の蔓蔦屋庄次郎の内の若紫の紋が亀甲に橘という『華よそほひ』の紋と一致し、『水か、み』での序列は⑳の女郎花の前である。よっ

て若紫と推定する。

③⑨は「水際の立や桔梗にをみなへし」という発句から蔓蔦屋庄次郎の内の女郎花と推定する。この時、蔓蔦屋には桔梗という遊女はいない。紋は『水か、み』のものと一致する。

④⑩は「藤波の蹴出すや裾の中の町」という発句から、兵庫屋平兵衛内のふじ浪と推定する。紋も『水か、み』と一致する。

④⑪は「むつましや本にも少し蝶番ひ」という発句から推定できる遊女はいない。描かれた紋が『水か、み』の兵庫屋平兵衛内の丹しうの紋と一致するので、丹しうとする。

④⑫は「雛鶴の心小心も松のはる」という発句から丁子屋長左衛門内のひな鶴と推定される。『水か、み』に描かれた紋は丸に丁子車である。

④⑬は「たちばなの薫るや雨の茶屋の縁」という発句から丁子屋長左衛門内のかほとと推定、丸に橘の紋も『水か、み』と一致する。

④⑭は「うわ客に松は常盤路ふゆ籠」という発句から丁子屋長左衛門内のときはちと推定する。この遊女は明和三年春刊『ウ来門』と明和三年秋刊『新吉原細見』にしか見ることができない。

④⑮は「客も升や花山をこゝに台のもの」という発句から、中万字屋庄兵衛内の花山と推定される。『水か、み』と紋が一致しない。

④⑯は「君涼し琴は座敷の中まんじ」という発句から、中万字屋庄兵衛内のつま琴と推定したい。ただ紋は『水か、み』と異なり、『水か、み』で紋が一致する遊女はな紫がいる。『華よそほひ』の他の事例は紋よりも発句が優先するようなので、一応つま琴とする。

⑥3は京町とだけ記されている。「若く」とまつ衣紋のふかみ艸」という紋と場所から、俵屋四郎兵衛内の若松と推定する。『水か、み』の紋は『華よそほひ』の紋を四つ組み合わせたものである。

⑥4は「三つ蒲団よしの、華の錦山」という発句から俵屋四郎兵衛内のよし野と推定する。『水か、み』の紋は変形の三扇である。

⑥5は「茶やく／＼に照るや田毎の月見客」という発句から俵屋四郎兵衛内のたことのと推定する。『水か、み』の紋は若松と同じ変形の三扇である。

⑥6は「はるか野にたれも抱あふ小松引」という発句から伊勢屋甚右衛門内の春日野であると推定される。『水か、み』の紋とも一致する。他の細見にも「はるがの」とあり、春日野の読み方が知られる。

⑥7は「駿河屋に涼しき富士やまつ君」とあるので、伊勢屋甚右衛門内のまつかせと推定したい。『水か、み』の紋は周囲の桔梗が見えない。発句に見える駿河屋は画面にも描かれた茶屋の駿河屋市右衛門のことであろう。

⑥8は「手枕にねさしも涼し花の出来」とあるので柏屋治右衛門内のたまくらと推定される。他の細見には「玉くら」と表記するものもある。紋は『水か、み』と一致する。

京町二丁目大菱屋久右衛門内の遊女は『華よそほひ』では、同じ紋を用いているが、『水か、み』には⑦6ひとへ、⑦8なを江、⑦9わか波には異なる紋を用いている。

⑩のきんざんは万字屋半四郎内の遊女ということになるが、諸細見に該当するものが見えない。細見刊行の間を縫って登場し、すぐに落籍、あるいは死亡したのであろうか。

⑧4みなと、⑧5若むらさき、⑧5ことぶきは「ゑちぜんや」こと越前屋喜右衛門内の遊女とされているが、実は小松屋源左衛門内の遊女である。両者が一体経営されていたような実態があったのかもしれない。

⑨5うら里が「かな屋」こと大かな屋ゑひ内の遊女とされるが、これは隣の長崎屋平左衛門内の遊女である。これは⑨5うら菊が長崎屋内なので、単純な間違いであろう。

さらに画面に描かれた新艘や禿の名、遊女の背景に描かれている茶屋もほぼ特定することができるが、省略する。

より大きな問題は妓楼名、遊女名が削られた理由である。遊女の名前よりは江戸町一丁目万字屋半四郎、扇屋勘兵衛、巴屋源右衛門、江戸町二丁目一文字屋清介、蔓蔦屋庄次郎、兵庫屋平兵衛、丁子屋丁左衛門、京町一丁目俵屋四郎兵衛、伊勢屋甚右衛門という妓楼が削られたと考えるべきであろう。前にみたような諸本の状況から火災等の影響は考えにくく、出板時にこれらの妓楼と入銀その他のトラブルがあり、削ったものかもしれない。

四 本書の成立と遊女絵本の系譜

本書の凡例に次のような一文がある。

又俳諧師らしき人申さるゝは 十とせ斗以前に 私が此どてのおちやあがりこぼしにてこしうちかけ 風のかほり夏の夜のすゞみかこ付蛭見のうそ何やかやが落合せて女郎衆の評判したる事侍りしが その翌年正月④此印の本屋から吉原出世鑑といふ評判の一緘になつて出けるが あまり是は穴過てやめになりたり

ここにいう『吉原出世鑑』^(注5)は宝暦四年初春に刊行された遊女評判記である。板元は浅草観音御地内の本屋吉重郎とあり、売所として通油町の地本問屋丸屋小兵衛と吉原江戸町の本屋弥七が名を連ねる。本屋重吉郎は『華よそほひ』の板元、伊勢屋吉重郎である。本屋弥七は寛延二年春刊『かふろまつ』によれば京町二丁目左側にいた「さいけん改」で、伊勢屋吉十郎や小泉忠五郎とともに鱗形屋板の吉原細見に名を連ね、宝暦六年春刊『委榮女居処』まで確認することができ

る。また五橋庵北巷置鶴の序文があり、「軸」として亀鶴堂主人の発句を載せる。凡例にいう「俳諧師らしき人」というのはこれらの人を指すものか。

『吉原出世鑑』の「評判」は書林が吉原へ細見の改に出かけた帰り、芝品川辺の二人連れと浅草者が吉原の評判を始めたところへ本所や神田の者が加わり、書林はその評判を聞き覚え、一書を編んだということを記す。これは『華よそほひ』の「凡例」と同工異曲である。また終わりの方の「口上」も『華よそほひ』の口上をそのまま模している。『吉原出世鑑』と『華よそほひ』を比較すると、遊女の評判の代りに遊女の画像と発句を加えてあり、遊女の紋が記されているところなども踏襲している。莫安柄「随筆吉原細見その一」^{注6}によれば江戸町二丁目家田屋太右衛門抱えのいさわ（伊沢）についての評判が原因で町奉行所から絶板処分を受けたとされるので、評判をやめて姿絵を加えることにしたのかもしれない。

したがって『華よそほひ』は吉原細見と同じ性格を持つと同時に、遊女評判記系の遊女絵本ということもできる。

遊女評判記に遊女の姿絵を描いたものとしては、古くは『吉原六法』（寛文八年から延宝初めにかけて）『吉原局惣鑑』（延宝三年刊）などがあるが、遊女絵本という体裁を取るのは元禄十三年刊『娼妓画牒』（初代鳥居清信画、翌年刊の奥付政信画とされる再刻本が稀書複製会から覆刻されているが、疑問点が多い）、正徳元年刊『奥村政信遊女の像』（奥村政信画）などがあり、『華よそほひ』はそれらに次ぐものとして位置づけることができるのである。

松葉屋内初風を描いた②は遊女が禿に何かを言い含めている図像である。奥村政信に同構図の紅摺絵があり、『金竜山千本桜』にも同構図の挿絵が入る。宝暦末の刊行と考えられている鈴木春信の「風流やつし七小町」の中の「逢夢」^{注7}も同じ構図をとっている。この例から考えると先行する一枚絵等からも影響を受けたものと思われる、他にも先行する類例が今後見つかるものと思われる。それらとの関係も今後の課題であらう。

『華よそほひ』の後の遊女絵本に与えた影響を考えると、もつとも重要なものは冒頭の花咲一男の指摘にもあるように『青楼美人合』であろう。

『青楼美人合』は大本五冊からなる多色摺の遊女絵本である。題簽には巻数の代りに「江」「江」「角」「京」「新」と記され^{〔注8〕}、「江戸町一丁目」「江戸町二丁目」「角町」「京町一丁目」「京町二丁目」に該当し、遊女の配列が町ごとに行なわれるという『華よそほひ』の方法を踏襲している。遊女の姿絵には妓楼名、遊女名、画賛の発句が加えられている。この発句は『華よそほひ』とは異なり、遊女自身の発句という体裁をとっている。

『青楼美人合』の刊記には次のようにある。

割剗氏 遠藤松五郎

明和七庚寅年六月吉日

通油町

丸屋甚八

吉原本屋

江戸書林売所

小泉忠五郎

駿河町

舟木嘉助版

丸屋甚八は地本問屋であり、吉原以外における販売を担当したものと思われる。舟木嘉助は須原屋嘉助のことで、藻雅堂と号した^{〔注9〕}。明和五年三月刊『古今吉原大全』に鱗形屋孫兵衛と共に板元として名を連ねている。後印本には「東都書肆 翠楊館蔵」とある^{〔注10〕}ので、田中庵（左簾）の序文にある「翠楊堂か書の林に植継く」は舟木嘉助であり、実質的

な板元であったのであろう。

『青楼美人合』の遊女名を吉原細見と対校すると明和六年秋ごろの遊女と一致するので、明和六年秋から冬にかけて企画されたことが知られる。小泉忠五郎は前述したように、明和七年春刊『吉原細見天の浮橋』の板元となり、吉原細見の編集作業と同時に『青楼美人合』が進行していたことが知られる。『華よそほひ』の板木を所持する小泉忠五郎としては、『青楼美人合』はその継承作としての意味があつた筈である。

その後遊女絵本は安永五年に北尾重政・勝川春章画『青楼美人合姿鏡』（山崎金兵衛・蔦屋重三郎合板）、安永六年に磯田湖竜斎画『東錦太夫の位』（鱗形屋孫兵衛板）^{（注1）}、天明四年に北尾政演画『新美人合自筆鏡』（蔦屋重三郎板）などが刊行される。このような系譜を考えれば、『華よそほひ』が遊女絵本として極めて重要な作品であることが改めて認識されるのである。

注

1. 『書誌学月報』第21号（青裳堂書店、一九八五年九月）p.1-p.5。井上隆明『近世書林板元総覧』（青裳堂書店、一九八一年）は菊屋清次郎の刊行物として「吉原遊君百姿（富川房信画）明和2」とするが、この論文を承けて改訂増補版（一九九八年）では「花よそほひ（富川房信画）明和2」と改訂されている。
2. "Livres & Albums Illustrés du Japon Reunis et Catalogués par Théodore Duret" (Ernest Leroux, Éditeur 1900年)
3. 八木敬一・丹羽謙治編『吉原細見年表』（青裳堂書店、1900年11月）p.405-p.419
4. 花咲一男編『明和後期吉原細見四種』（近世風俗研究会、一九七六年）

5. 八木敬一編『宝暦期吉原遊女評判記細見四種』（近世風俗研究会、一九七五年）に影印と解題が備わる。
6. 『今昔』第二卷第九号（通卷第十二冊）p.20、一九二二年九月。
7. 「逢夢」は禿が遊女から言い含められたことを誰かに復讐することから鸚鵡を利かせた見立絵となっている。
8. 藤沢紫『鈴木春信絵本全集』（勉誠社、110011年）p.213
9. 井上隆明『改訂増補近世書林板元総覧』（青裳堂書店、一九九八年）による。『割印帳』によれば天明七年九月に割印を受けた『信連歌』の板元であり、寛政六年三月二十五日割印の『金峨先生文集』が最後の記録である。南組に属した書物問屋であった。
10. 中野三敏「『古今吉原大全』解題」（洒落本大成第四卷、中央公論社、一九七九年）による。中野は「舟木嘉助は藻雅堂と号しており、翠楊館の身元はいま不明である。」としている。
11. 浅野秀剛解題『秘蔵浮世絵大観三 大英博物館Ⅲ』（講談社、一九八八年）

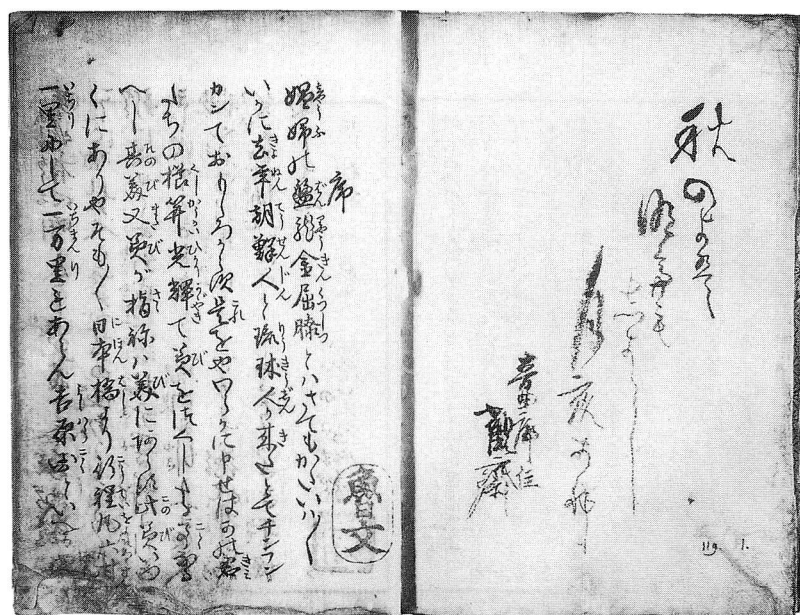
付記

末尾ながら、『華よそほひ』の影印のご許可をくださったパリ国立図書館、資料の複写をご許可くださった大阪大学、天理図書館に御礼を申し上げる。また本稿の執筆にあたっては、注に引用した以外にも八木敬一・丹羽謙治編『吉原細見年表』の学恩を蒙った。

なお明和二年秋刊『細見入狭家満』（個人蔵）、明和七年春刊『吉原細見天の浮橋』（天理図書館蔵）の調査が間に合わなかったので、考証に不備を生じているものと思われる。改めて補訂を行いたいと考えている。



(上巻表紙)



(上巻見返し、1才)



①

(上3ウ・4才)



③

(上4ウ・5才)

②



⑤

(上5ウ・6才)



④



⑦

(上6ウ・7才)



⑥



⑨

(上7ウ・8才)



⑧



⑪

(上8ウ・9才)



⑩



⑬

(上 9 ウ・10 才)



⑫



⑮

(上 10 ウ・11 才)



⑭



⑪

(上 11 ウ・12 才)

⑫



⑬

(上 12 ウ・13 才)

⑭



(25)

(上 15 ウ・16 才)

(24)



(27)

(上 16 ウ・17 才)

(26)



②⑨

(上 17 ウ・18 才)

②⑧



③①

(上 18 ウ・19 才)

③⑩



③③

(上 19 ウ・20 才)

③②



③⑤

(上 20 ウ・21 才)

③④



37

(上 21 ウ・22 才)



36



39

(上 22 ウ・23 才)



38



④①

(上 23 ウ・24 才)

④②



④③

(上 24 ウ・25 才)

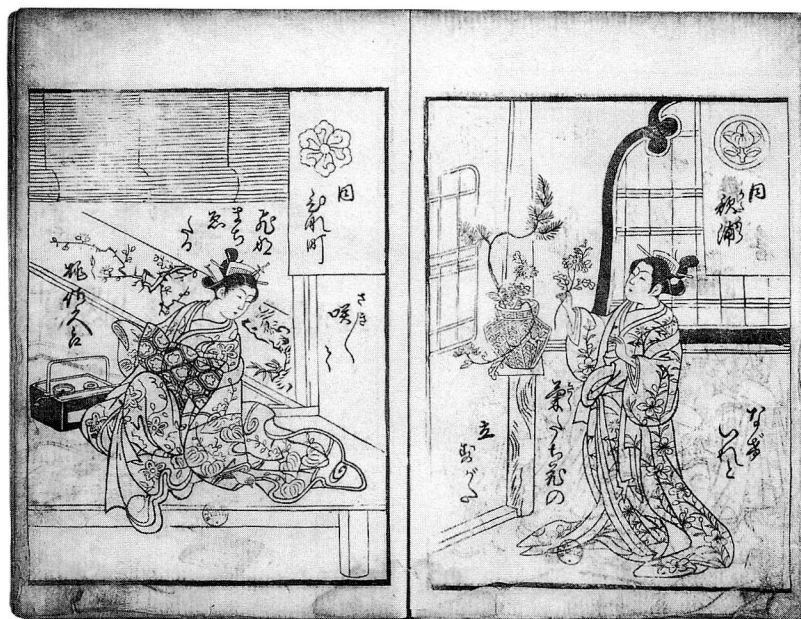
④④



(45)

(上 25 ウ・26 オ)

(44)



(47)

(上 26 ウ・27 オ)

(46)



(49)

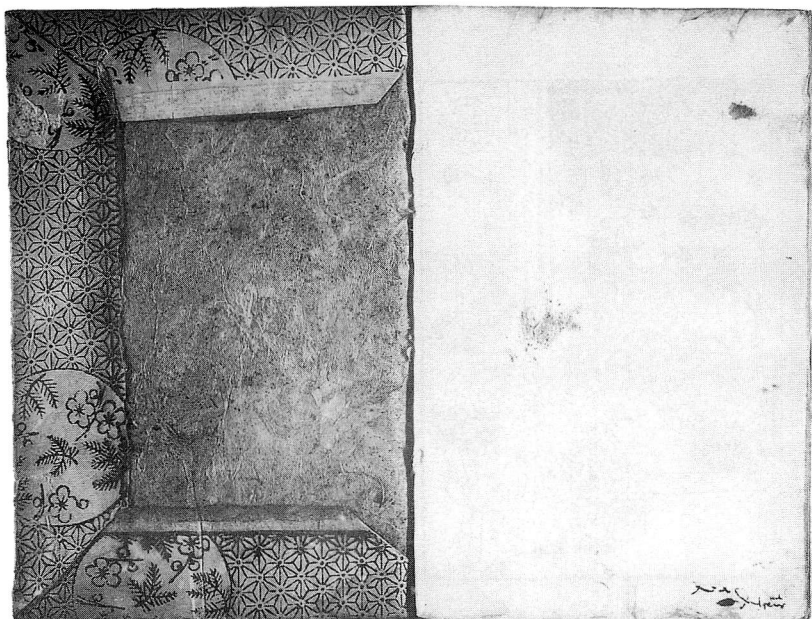
(上 27 ウ・28 才)

(48)

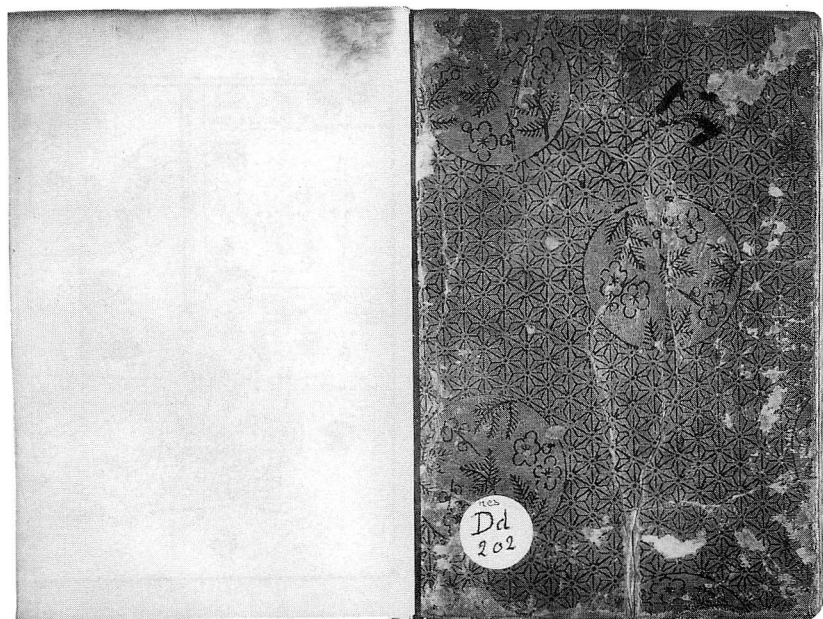


(上 28 ウ・裏表紙見返し)

(50)



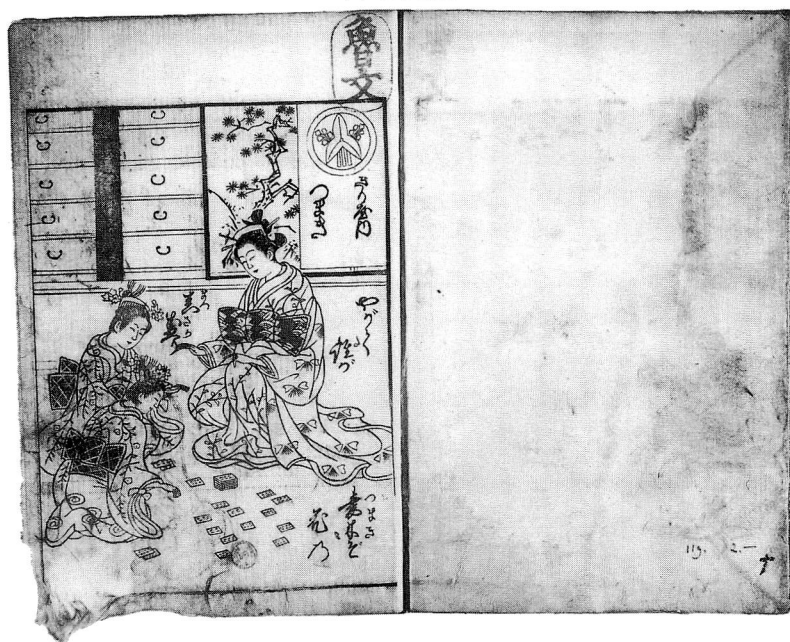
(上巻裏表紙中)



(上巻裏表紙)



(下巻表紙)



⑤ (下巻見返し、1才)





(57)

(下3ウ・4才)

(56)



(59)

(下4ウ・5才)

(58)



⑥1

(下5ウ・6才)



⑥0



⑥3

(下6ウ・7才)



⑥2



65

(下7ウ・8才)



64

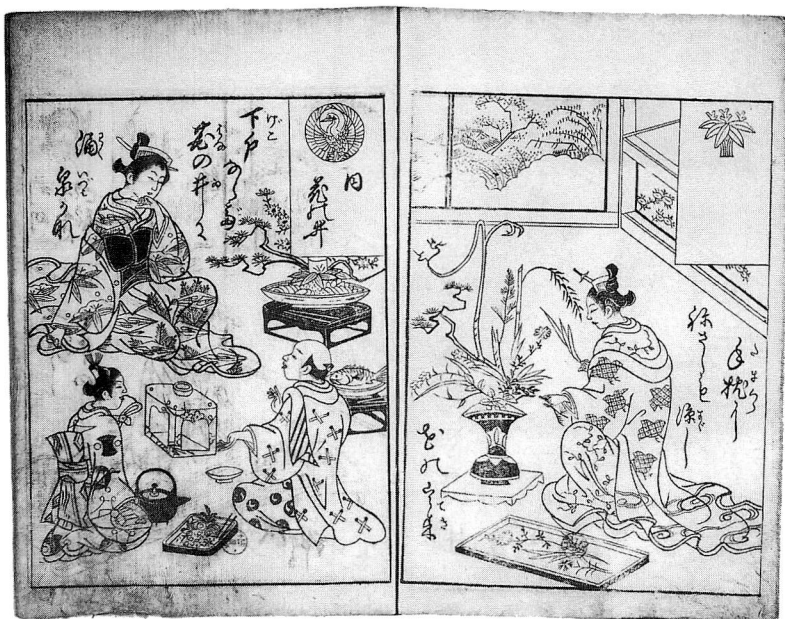


67

(下8ウ・9才)



66



69

(下9ウ・10才)

68



71

(下10ウ・11才)

70



73

(下 11 ウ・12 才)

72



75

(下 12 ウ・13 才)

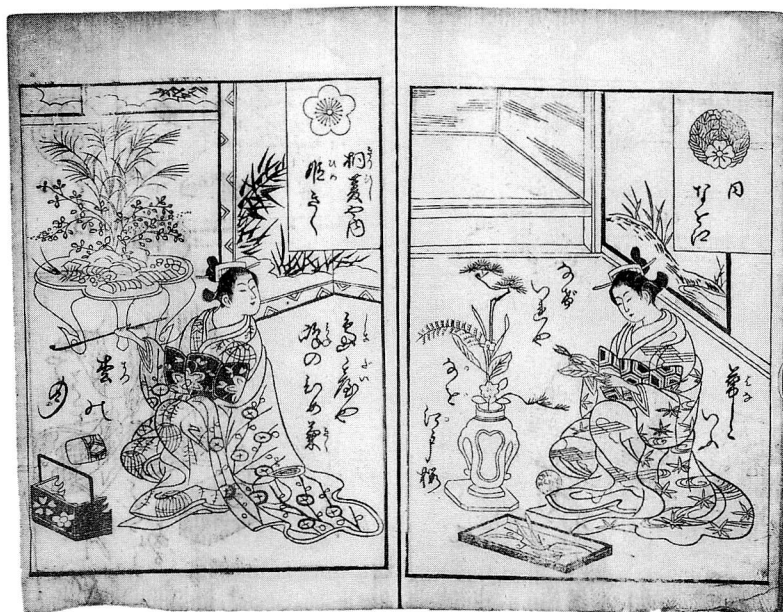
74



⑦⑦

(下 13 ウ・14 才)

⑦⑥



⑦⑨

(下 14 ウ・15 才)

⑦⑧



⑧1

(下 15 ウ・16 才)

⑧2



⑧3

(下 16 ウ・17 才)

⑧4



(85)

(下 17 ウ・18 才)

(84)



(87)

(下 18 ウ・19 才)

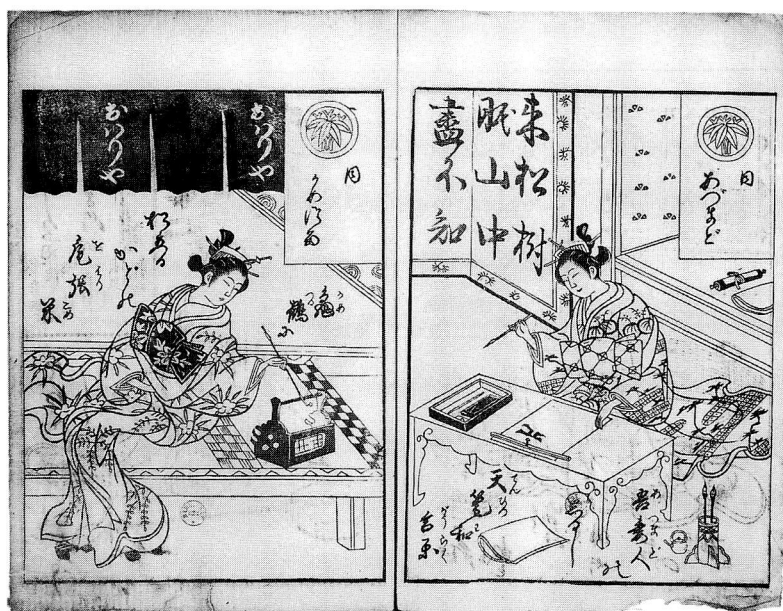
(86)



(89)

(下19ウ・20才)

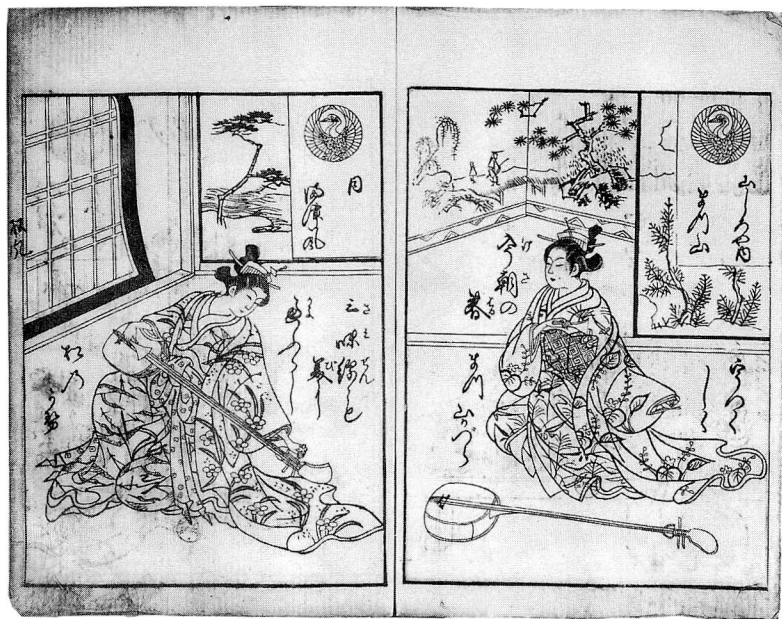
(88)



(91)

(下20ウ・21才)

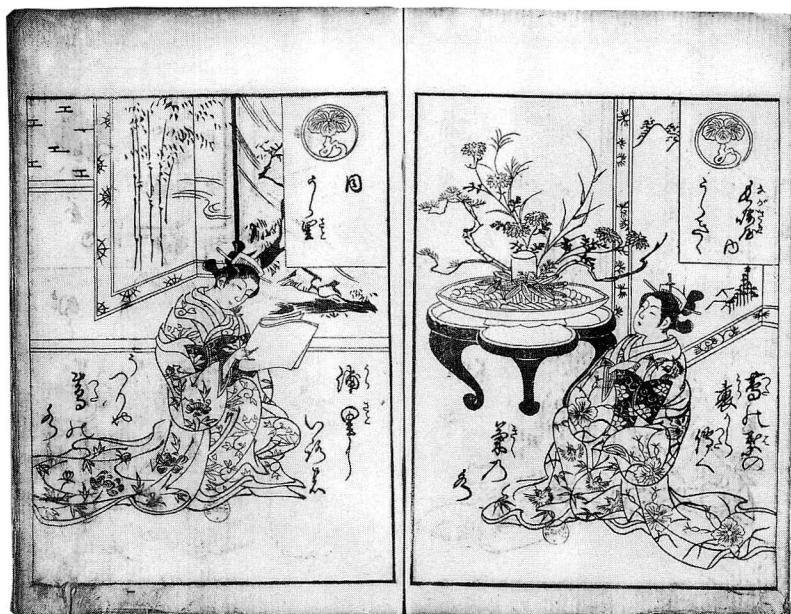
(90)



93

(下 21 ウ・22 才)

92



95

(下 22 ウ・23 才)

94



97

(下 23 ウ・24 才)



96

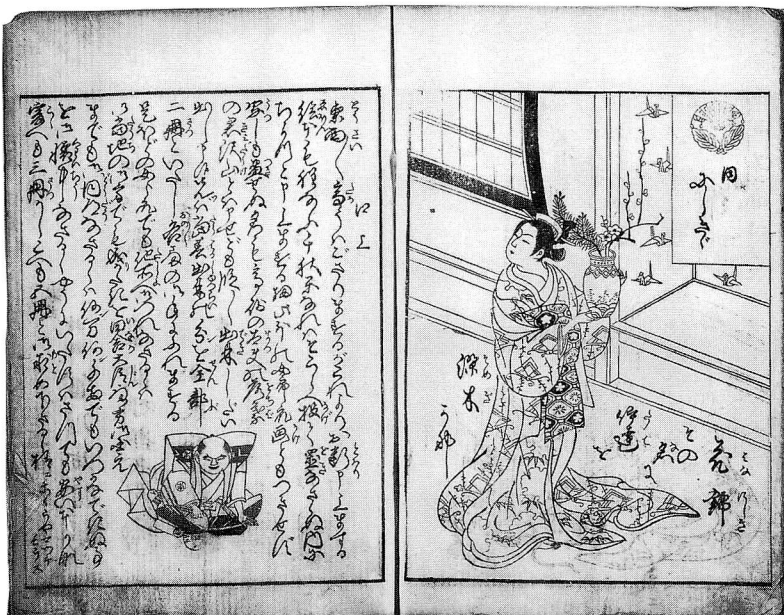


99

(下 24 ウ・25 才)



98



(下 24 ウ・25 才)

(100)



(下 26 ウ・下巻裏表紙見返し)



(下巻裏表紙)